

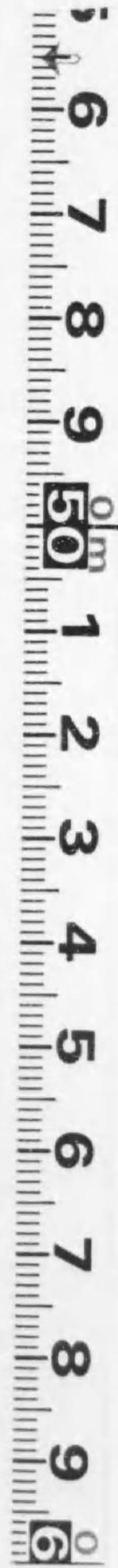
特115

532

著山 岩 藪

塔 の 基 一

行刊部本會樂三



始



43115
532
1

藪 岩 山 著

一
基
の
塔

三 樂 會 本 部 刊 行

大 正

15. 9. 29

内 交

序

本書は今日迄折にふれて書き綴つた、断片的なものの一部を、たゞ雑然と集めたもので、之又實に著者が若き日の記念塔である。

『病床語』は、先年急性腎臓炎で、前後二ヶ月を病床に過したが、その折々に思ひ出したことを、看護の人々に書き取つてもらつた感想録の片鱗であるが、若き日の思ひ出には捨て難きものゝ一つとして巻末に附することゝした。

大正十五年九月一日

著者

一、	基の塔	一
二、	櫻落葉	二
三、	春日燈籠	二
四、	禪堂	三
五、	鳳仙花	三
六、	法被	三
七、	沈黙の世界	四
八、	細民部落	五
九、	淺草	六
一〇、	電車	六
一一、	殿堂	七
一二、	偉大な人	八

目次

一三、温	情道交	九
一四、旅	を	〇
一五、お	かけく	一
一六、あ	なたま	二
一七、人	の心	三
一八、鯉	の生き	四
一九、成	功	四
二〇、楞	牛の言	五
二一、遺	書	六
二二、發	展	七
二三、結	論	八
二四、吝	世	八
二五、處	術	九
二六、反	省	〇

二七、上	を	向	け	二
二八、鑑	定	二		
二九、悠	久	二		
三〇、清	冽	二		
三一、體	驗	三		
三二、水	脈	四		
三三、緊	張	五		
三四、新	しが	六		
三五、辭	世	七		
三六、古	筭	八		
三七、白	骨	九		
三八、ヒ	ア	〇		
三九、打	算を	一		
四〇、名	畫を	二		
	拜	三		
	む	四		



一基の塔

裏の野道の辻に草に埋もれて、一基の塔が立つてゐる。それは七寸に二尺位の極小さなものである。

朝に夕に参詣の人々が来ては線香をあげたり花を手向けたりして行く。

石の表には中央に「四國八十八ヶ所供養」としてあつて右方に「明和四年武州豊島郡長崎村」左下に「亥八月吉日願主甚立」と刻されてある。

如何な人が如何なる願で建てたのか知らぬが、明和四年といふと今から百五十餘年前で山縣大貳等が罰せられた年だ。同六年には賀茂真淵翁が歿せられた。

其後幾代りも人が死んだり生れたりして世は種々に移り變つた。これからも亦人は永遠に生れたり死んだりを繰り返すのだなと思つて、じつと此の石を見つめて居ると、何とも言ひ知れぬ感に打たれる。

櫻落葉

櫻落葉の上野の山の秋は各種の美術展覽會の開かれることによつて、美の世界が一層その色の濃さを増す。

藝術の藝術たる所以の本質は有限そのものに即して其所に無限性が活躍し來るところにある。

故に無限の境に遊び得る者にして初めて眞の藝術を鑑賞することが出来る。

春日燈籠

春もよく、秋もよく、雨もよく、風もよい奈良に旅して、春日神社に詣でた者で、あの無数にある所謂春日燈籠の美觀に打たれないものは無いであらう。用不用を絶した所に眞の尊さがある。

あまりに實利主義に墮した現代を悲む。而も春日燈籠の實用の具に供せられざるの故を以て無用の長物なりと論じ去る馬鹿者はあるまい。美の世界に住み得る心の持主は幸である。

禪堂

或年の春鎌倉の圓覺寺に參じて、其昔夢窓國師の禪堂であつた黃梅院に一夜を明したことがあつた。

其の夜その朝心に通ふ松風の聲山氣雨の如くにせまる。

そこに忘れることの出来ない純一無雜の境地を味ふことが出來た。

鳳仙花

「柳綠花紅」と書かれた壁間の額、柱には句短冊が掛けてある。

書棚の上の一輪挿しには萩と野菊が挿し交せてある。

硝子戸越しの庭の鳳他花は今を盛りである。

秋晴れの此の武藏野の小家にも俗塵を超脱した絶対境がある。

吾人は不平と不安と争闘とから逃れて静かさの中に没り盡す瞬間を持たなければならぬ。

法 被

小泉八雲氏の日本印象記にこんなことが書いてあつた。「見渡す限り旗がひるがへつたり、紺暖簾が揺れたりして、それに皆和漢の文字が書いてあるので、美しく且つ神秘に見える。」

「労働者の衣服にも暖簾と同様不思議な文字が書いてあるのが目につく。何んな唐草模様でも、これ程の趣きが無い。裝飾上幾分恰好を更へて書いた是等の文字には意味を示さない。何んな意匠にも見えぬ意義躍如たる均齋がある。職人の法被の脊中で紺地に眞白く且

つ遠方からもよく讀める程大きく文字が現れてゐると、粗末な安い衣服も派手な技巧的の趣を呈する。」と。

私どもはどれだけ美しさを感じ得る力を持つてゐるのであらうか。

沈黙の世界

上野公園の韻松亭に催された集りに臨んだことがあつた、午前九時に會が開かれて、百人近くの人が二階の幾間かにあふれた。

障子の外には櫻落葉の中を往き來の人の賑かさがある。そして其また外の町には一際騒がしさがある。

併しながら喧騒を極むる現代の社會生活の中にも、絶対の沈黙の世界があることを忘れてはならない。

細民部落

一日富川町猿江裏町邊の細民部落を見た。

三疊一間に家族九人が生活してゐるのや、三十戸にたゞ一つの水道を使用してゐる長屋や目もあてられない光景だ。併しそのどん底の生活をしてゐながら、窓際に植木鉢を置いたり、一寸の空地に朝顔を咲かせたりしてゐるのがある。その日の糧に困つてゐながら、中には掛物や額等を樂んでゐるものさへある。人間は畢竟趣味に生きるのだと思つた。

浅草

浅草に出かけた。

例の雑沓の中に人間味の豊かな華かさがある。

活動寫眞館はどれも／＼満員の盛況。盲目の乞食音楽家が薄暗がりの本蔭に奏つる三味線の音にも夏の夕の歡樂境の氣分がたゞよふ。

割引で踊を見た。こゝにも藝術の民衆化がある。

娛樂の世界——そこに人間の世界がある。

電車

世の中が益々荒んで行く。

毎日電車の中で見せつけられる悲しい事實、喧嘩、口論にらみ合ひ、嗚呼何といふ醜さだらう。

最近に歐米視察の旅から歸つた某博士は、日本の新聞を評して罪惡新聞だと言つた。罪惡の記事で満たされてゐるからである。

そこには人間の淺ましさが露骨にさらけ出されてゐる。どうして、もつとうるほひのあ

る社會にならないのだらう。

殿 堂

或る日母のお供をして成田参りをした。

松の内のことゝて善男善女の人の数は特に多い。

どの電車もすゞなり満員の盛況である。

成田さんと宗吾の靈堂とに参詣して日暮東京の家に歸つたのであつたが、あの大きな御堂を見るにつけても、この人の世の憎み妬み嫉み争ひといったやうな事實のあまりに多いのを思ふて悲しくなつた。

人類愛の大殿堂はいつ建つのであらう。

偉 大 な 人

佛國の小學讀本には偉大な人と題して「ナポレオンの様な人は本當の偉い人ではありません。あれはたゞ世界を掻き廻したゞけです。本當の偉い人といふのは人類の幸福を進める爲に發明をした人や、人間の値打を引上げる様な藝術に力を盡した人たちです。」と書いてあるとのことである。毎日の新聞を見て殺伐な現時の世相を眺める時、何ともいへぬ悲みに襲はれる。

温 情 道 交

東京の或る夜學校の先生が一人の生徒にその感想を問ふた。生徒は「何もありませんが只生徒同志御互ひがもつと親密にならないものでせうか」と答へた。

私はこの話を聞いて考へさせられた。

どうしても血の氣の通つてゐる人達の集りとは思へない程、あまりに冷かな社會の現状を悲しく思ふ、せめて我々の周圍だけでもどうか常に縦にも横にも心の糸の交りあつてゐ

る、温い、うるはしい、力強いものでありたいと願ふ。

旅をして

早春三月京阪地方を旅行した。忙しい日程の時間を割いて桃山御陵を参拜したり清水寺の春を賞したりした。

櫻には少し間のある祇園の夜的情绪にも浸つた。

三條から五條あたりの柳が芽ぐんで夢の如な光景を呈する。

大坂城にも登つた、天王寺の大釣鐘も見た。道頓堀では中座の彌生狂言雁次郎の腕久をのぞいたりした。

京は新京極、大阪は千日前の賑かさ。

「だんなはんが門口で待つてやはるやろ」

「あほらしい」

「あの人きやはりましたやろ」

「せはしい思ひしたやろ」

「そをだつたかおほきに」

電車の中で二人の婦人が語り合ふた言葉が今も耳に残つてゐる。

大阪は煙の都海の町、京は繪の町唄の町、そして東京は——。

旅に出てその先きさきで多くの人の情けに浴することの出来た私は、たとへ其土地土地によつて、風俗や人情に變りはあらうとも、凡ての人の心の中に流れてゐる美しい或るものを見のがすことは出来なかつた。

おかけください

龜澤町の電車交叉點の角に壽徳庵といふ菓子屋があつた。その軒下に「おかけください」と書いた一つのベンチが出てゐた。

電車を待ち合せてゐる間をこで雨やどりも出来る。疲勞を休めることも出来る。電車で通る時、よく子持女がそのベンチでおしめをとりかへてゐたり、病身らしい人が休んでゐたり、老人が掛けてゐたりするのを見かけた。弱き者、疲れたる者、食しき者、病める者に慰めを與へたい。倦める者、怠れる者、敗れたる者、傷ける者を勵したい。そしてより住みよき世界をつくりたい。これは私どもの念願である。けれどもそれがただ一つのベンチの役さへ果すことの出来ないのを口惜しく思ふ。

あなた任せ

おらが春一卷を通して一茶が如何に信心堅固であつたかを知ることが出来る。「から風の吹けば飛ぶ屑家のあるべきやうに、門松立てす煤掃かず、雪の山路の曲りなりに、今年の春もあなた任せになん迎へける」

目出度さも中位なりおらが春に筆を起して

「さて後生の一大事は其の身を如來の御前に投げ出して、地獄なりとも極樂なりともあなた様の御はからひ次第遊ばされ下さりませと御頼み申すばかりなり」

ともかくもあなたまかせの年の暮に筆を擱いてゐる。

その安心の境涯、彼が清貧に處して猶怡然として餘樂ある生を送つたことを羨しく思ふ。

人の心

ほんとの人の心にふれた時程嬉しいことはない。

お互いの心と心とがとけあつてそこにあたゝかい情が流れる。

信じ合つた人達と語り合つて居ると、時間の經つのも何も彼も忘れてしまふ。

まして道の友。

ことに秋の夜長は——冬夜の爐邊は——。

鯉の生きづくり

福井縣の久々子の濱に行つた時聞いた話だが、先年八代大將が此の地に來られた時、鯉の生きづくりを御馳走するといふて、大騒ぎをしてゐたら、大將はそれを聞かれて、御厚意は受けるが御馳走は御免こうむる。折角だからとて鯉だけ貰ひ受け、出来るだけ長く生きられるやうにと、某氏の池に放たれたので、其の話を語り傳へて、地方の識者達は神様の如くにこの慈悲心を有難がつてゐた。

成 功

變化は或る意味に於て生活内容を豊富にする。

單調は人生を無味乾燥ならしめる。

平凡な日を送ることは唯徒らに年月を積み重ねるに過ぎない。

成功——それは努力の連續の結晶である。

樗牛の言葉

先年龍華寺に樗牛の墓を訪うた。

「吾人は須らく現代を超越せざるべからず」と刻まれた碑が、三保の松原あたりの海岸に面してゐて、絶勝の地である。寺で賣る繪葉書の中の一葉に、近詠一片として次の言葉が書かれてあつた。

「如何にうるはしく空にかゝやけばとて終には地に沈むべき日ぞ。青春人にして幾時ぞ。思へで惜しき過去なりき」

この一語よく若さに躍る青年の胸をえぐる。

刻々の努力刻々の精進なる哉。

遺書

國定忠治の首に添へて、其師僧（忠治の手習師匠）養壽寺の住職が後住に書き残したといふ遺書が発見されたさうだ。

師弟の情義のゆかしさが偲ばれる。

『今度大戸御所刑場警固のものより密かに貰ひ受け埋葬致し置き候公儀を押しかくし、知らざる體に成し置き候も搜索方厳しく且つ友藏（忠治の弟）を取押へんと隠密晝夜立ち廻りて市之丞親子（忠治の父か）まで疑を受けてこの儘さし置き候はゞ露顯致すべくよつて捨ておき難く秘密に納めおき候也向後此首見當らば一遍の回向賜はりたく願上候

嘉永三年十二月廿一日

師僧養壽寺 貞 然

養壽寺法印様

發展

一と夏福井縣の三方湖の邊を旅した時、當時の郡長であつた某氏から聞いたのであるが三方の町には由來藝者の育つたためしがないさうである。

それは土地の先輩が常に青年師弟の爲を思ふて悪風潮の入らぬやうに努めるからだとのことであつた。

老年や中年の人達が待合びたりをしたり、青年が酒と女におほれたり、料理屋と藝者屋の繁昌するのを景氣がよいと稱したりする地方の多いのを悲しく思ふ。

覺めよ青年。

文化に對する吾人の創造的態度が人類を向上發展せしめ、享樂的態度が之を墮落せしめる。

知らず、世人の言ふ「發展する」とは何を意味するのであらふか。

結

論

社會教育家として知られてゐる或先輩からの通信の中に書き添へられた言葉に「一日を隅から隅まで眞面目に働かれるだけ働くの外はなしと存じ候」とあつた。氏が數十年の研鑽が生んだ最後の結論はこれであつた。嘗て鷄足寺の住職小林正盛老師から次の詩を贈られた。

我敵懶兒復慢兒

人間面目以何支

無休息是真生命

夏熱冬寒努力時

かれこれ思ひ合せて深く考へさせられた。

客

先考篤所翁が嘗て或日の某新聞に客齋だといふことを書かれたことがあつた。

それを見た翁は苦笑したのみで即座に筆を取つて、知己の間柄である社長宛に

「今朝の貴新聞によつて反省の材料を與へられたことを感謝する。」といふ意味の手紙に添へて、左の狂歌を書き送つた。

我はもと文と口とに疎き身の

客といはるゝことぞおかしき

翌朝の新聞にはその手紙の全文が發表されて、前の記事の全く事實無根であつたことが斷つてあつた。

處世術

或る小學校の老校長は新任の教員に向つて處世上の方針として「日中早く仕事を切り上げて歸るやうな時には、裏通りをこつそり急いで行きなさい。又夜おそくまで働いた時は

學校の提燈をつけて、町の真中を人の目につくやうに、ゆつくりと歸りなさい。萬事この調子でやれば忽土地の人から熱心な良い先生だと言はれるやうになるだらう」と教へた。又或役所の所長は部下の者に向つて、官界游泳術として「平常の仕事は誰がやつても大同小異でたいしたことはないから、人並に務めてるればよい。只突發的な大仕事にぶつゝかつた場合には、全力を注いで一生懸命にやりなさい。其度毎に拔擢されて出世することが出来るだらう。」と教へた。

反 省

或る徳高き人が曾て何かのことで、數名の暴漢から打たれたことがあつたが、見舞の人に向つて、

「少しも疚しい所がないから驚きも恐れもしなかつたが、打たれてゐる瞬間に、嗚呼氣の毒なものだといふ心持が起らなかつた。僕はまだ駄目だ」と語られた。

其人が歐米各國を視察して歸朝された時「あちらに行つて來てから急に憶病になつた。多くの人の前で話しなどする勇氣はない。」と言ふてゐられた。

あらゆる機會に於て自己を反省することの出来る人は尊い人である。

上 を 向 け

新米の水兵がマストの上の作業を命ぜられて櫓高く昇つて行つたが、途中で一寸下を見たら急に恐ろしくなつて、足がすくんで一步も進めなくなつた。此の容子を下から見つてゐた隊長が、劍を抜いて「上を向け」と大聲で叱咤した。

水兵はその聲に勵まされて、天の一角を見つめた。そしていづこまでもと上空高く昇つて行つた。

鑑 定

昔贋金が盛に造られたので、これを見分ける役が出来た。或者はこの贋金を鑑定するの
に贋金ばかりを研究した。又或者は正金ばかりを研究した。

結果はどうであつたかといふと、贋金ばかりを研究した者は、目がくらんで正しい金の
鑑別が出来なかつたが、正金ばかり研究してゐた者は、正金以外は全部贋金だから直ちに
鑑定することが出来るやうになつた。

悠

久

深川史料展覧會を見た。

江戸時代に於ける深川文化の粹を集めたもので、芭蕉の手紙や句短冊など尊いものが多
くあつた。

豊國の妓女の畫に蜀山人が

春秋を富か岡とはこれならん長生殿の中町の君

と贊をしたものなど殊に面白いものであつた。

今は煤煙の工場地帯と化してしまつたが、其昔は江戸趣味の中心は深川からと言つても
よい位であつた。

然し如何に世は移り變らうとも、そこには永遠に無窮に變らざる或ものが流れてゐる。

地上に於ける五十年の生活は、決して限られたる五十年だけのものではなかつた。悠久
といふことを考へさせられた。

清

冽

人の言葉や行ひを、そのまますなほに真正直に受け入れることの出来る人は幸福である。
善い行ひを見ても貶してしまひ、立派な言葉に接しても、何とか理窟をつけてみなければ
承知しないといふのが今の多くの人の心持ちではあるまいか。

善き事を善き事として受け入れることの出来る心の持主となりたものだ。

心を開いて待つてゐると、善き事美しき事正しき事が數限りも無く入つて來るのではあるまいか。

濁つた心にはすべてが濁つて映る。清冽な秋の水、そこには月影も浮び星も光を宿す。

澄み切つた月の光に照される時、一切が美であり、萬物悉くが清淨の世界である。

ともすれば曇り勝ちな心の鏡にかゝる雲を拂ひのけ拂ひのけて、常に澄み切つた心で居りたいと思ふ。

體 驗

經驗は尊い一度實際に行つたことでないと自信がつかない。又屢經驗することによつて力がつく。

自信の無い者は常に弱者である。

熟練せずに妙技を修得することは出来ない。

「習ふよりも慣れろ」と言ふ。「習慣は第二の天性なり。」とも言つてゐる。

新しき一つくを経験することによつて、力を増すといふことも大切であるが、同じことを何度も繰返すことによつて、熟練の妙境に達することも必要である。

體驗せざる空理空論に何の權威があらうか。

水 脈

堀抜井戸を堀つてゐる。

昨日も今日も、毎日々々堀つてゐる。小止みも無しに堀りに堀る。地下水に堀り當てた時絶えざる清泉が迸り出るであらう。

夏に入ると東京では「水を粗末に使はないで下さい」といふ意味のビラを撒いたり、電車の中に水の使用量の統計を掲示したりして、盛に水の節約を宣傳する。それでも水道の水は涸れる。郊外も高臺になると井戸の水がよく出なくなることがある。

然し一度水脈に達した井戸からは汲めども盡きぬ靈泉が滾々と流れ出る。

緊張

嘗て四國を旅行した時、或日の午後、屋島の古戦場を歩きまはつて那須與一祈岩の側に立つた自分は、當時の光景を繪巻物の如くに思ひ浮べた。

「歸命頂禮八幡大菩薩日本國中大小神祇別しては下野國日光宇都宮御神那須大明神扇を座席に定めて給へ、源氏の運も極まり、家の果報も盡くべくば、矢を放たぬ前に、深く海中に沈め給へ。」と祈念してゐる與一の姿が目につく。

命を賭して引きしほつた弓勢に、扇の的はふつと射られた。敵味方からの大喝采を博した彼の得意さを思ふ。

私は立ち去りかねた。涙が止め度なく流れ出る。何を爲す場合でも、神佛に祈願をこめて、與一が引いた弓の弦のやうに張り切つた心で、其事に當ることが出来たらと思つた。

新しがりや

父からよく聞かされた話だが、郷里野州黒羽の舊藩主大關侯は非常な名君で、二十八歳の時に幕府の海軍奉行兼陸軍奉行となり、出でては幕政に參與し、入つては藩政の改革に多大の力量を示した。

その位だから又頗る新しい考へを持つてゐたもので、洋式訓練を最初に實施した一人であつた。

江戸は神田五軒町に住むで居つたが、早い頃から歐風心酔者で、外國の寫眞を船大工に突つけて無恰好なボートを作らせ、オールを繰ることを稽古したり、或は奥方と轡を並べて市中を馬で散歩したりしたものだから、口悪るの江戸子は「夫婦して江戸洛中を乗り廻し異人まねする馬鹿の大關」といふ落首を流行らせた。

明治の少し前迄は西洋馬具で夫婦して乗り廻してさへ、新しがりやと世間から笑はれた

ものだのに、今では一も西洋二も西洋で、あちらの新聞の隅に一寸出た位のことでも大騒ぎをする始末で、何でも彼でも直ぐ古いとけなしつけてしまつて、新しいもの新しいものと走つて行く。少しも深みが無い。足もとを忘れてゐる。世の中も變つたものだ。

辭世

芭蕉翁が病重く頼みなくなつた時、せめて辭世の句を承り置かうといふので、去來から翁に其事をいひ出した。

翁がいはれるには「きのふの發句は今日の辭世、けふの發句はあすの辭世、われ生涯いひすてし句々、一句として辭世ならざるはなし。若し我が辭世はいかにと問ふ人あらば、此の年頃いひすて置きし句いづれなりとも辭世なりと申したまはれかし、わが一風を興せしより初めて辭世なりその後百千の句を吐くに此意ならざるはなし。こゝを以て句々辭世ならざるはなしと申傳るなり。」と此語實に玄々微妙翁の凡人ならざるを知ることが出来る。

此の抱負あり、此の確信あつてこそ、正風を唱へて天下を風靡することも出来たのである。

一句一句がすべて皆辭世であるとは、何といふ力強い言葉であらう。我々が事を爲すにはこの位の用意と決心とがあつてほしいと思ふ。

生きることに眞劍でなければならぬ。何を爲すにも自己の全部を投げ出して之に當らなければならぬ。

一擧手一投足のその悉くに生命が躍動してゐなければならぬ。

古箏笥

彼は無一物で飛び出して何とかして成功しやうと決心した。先づ呉服物の行商を始めた。奮闘努力の結果小さな店を出すことが出来、其後次第に發展し遂には土地での屈指の資産家となつた。

彼は死の間ぎはに長男を枕頭に招いて「あの筆筒は私が初めて店を持った時に買ったもので、今日迄の苦心を物語る唯一の品であるから、如何なことがあつても常に店に置いて昔のことを忘れぬやうにせよ」と遺言して冥目した。

間もなく家が改築された。若い女が出入りするやうになつた。古筆筒は姿を消した。相続人が道樂を始めて、數年ならずして家産が傾いてしまつた。

或入客に向つて小さな土鍋を示して「これは今から十何年前初めて結婚生活に入つた時に買ったものです。捨てるにはあまりに惜い思ひ出の種ですから、一生保存して置いて、時々取出しては追想し苦しかつた當時の生活状態を忘れぬやうにしてゐます。」と語られた。家運隆々。

白 骨

東京市の墓地は多麻、青山、谷中、染井の四ヶ所が全部で三百三十萬坪あるさうで、そ

れが分割し盡されて全く餘地が無くなつたので、骨を掘り出し墓地の整理を行つて坪三百圓から千圓までにされてゐる。だから市民は新墓地を築くに非常な苦痛を感じる。

爲に近頃では寺に納骨堂が出来て、骨壺を一所に安置して置くやうになつた。其數が十三四ヶ所にも達してゐるといふ。生れては死に生れては死んだ人の數、これからも亦生れては死に生れては死ぬ。

人生五十誰も彼もが皆悉く遂には白骨と化す。

白隠禪師歌つて曰

何事も皆打ちすて、死んで見よ

ゑんまも鬼もぎやふんとするぞ

ヒ ア シ ンス

マホメットは「自分が若し二片の麵麩を持つて居れば、その一片を賣つてヒアシンスを

求め以て精神を養はふ」といふ意味のことを言ふてゐる。

ヒアシンスは紅や紫の花の咲く草花であるが、彼の回教の開祖として片手にコーランを持ち片手に劔を持つて、マホメット教の宣傳をした彼にも、かゝる半面があつたのである。「吾人は麵麩のみに生くるものにあらず」の叫びは決して空なるものであつてはならない吾人はマホメットの此の一語に聞いて三思すべきである。

打算を超越して

年の瀬の押し寄せまつた或日、一行十数名で冬枯の武蔵野を歩いたことがあつた。名所舊蹟をさけ、わざと宿場街道筋をさけて、そこには只の菜畑大根畑、或は冬の田冬の濁川などがあつた。落葉の林の中に入つたりした。すぐそこには大東京があり餘日少い年末をかへて、各自の頭には可成の混亂がある筈であり、眼前にはたしかに人事葛藤の世界があるにもかゝらず、一步去つてこの大自然にひたとふれた時、全く別の世界にあるが如

き感があつた。

又或夜数人の友と暮の町を歩きまはつた。あてどもなしに目的もなしに、出雲町から銀座通りを京橋に出て、鍛冶橋から有樂町、日比谷公園をぬけて芝の佐久間町から赤坂を一とまわり、赤坂見附から四谷見附、それから夜店を素通りに鹽町まで、そこで夕飯をすませて初めて電車に乗るまで、夕方の四時頃から九時近くまで足にまかせて歩いた。銀座通りの暮氣分、日比谷公園の暗がりでは見るべからざるものを見た。又虎の門附近ではサンドキツチマンが五人も列をなして來るのに出合つたりした。

此の世智辛い世の中に、不景氣な歳末にと笑ふ人が多いことであらう。笑ふをやめよ、そしてたまには利害と權利義務と、争闘との生活から抜け出て、打算を超越した世界に立つてみるがよい。實名と虚榮と金儲けとの爲に血眼になつてゐることのみが人生でないことがわかるだらう。

名畫を拜む

畫家にして俳人であつた蕪村の名は、子規居士の蕪村研究以後誰知らぬ者もない位に喧傳されるに至つた。彼が残した言葉に

- 一、我に妻子眷屬なし、書畫をもて妻子眷屬とす
- 一、我に朋友なし、書畫をもて朋友とす
- 一、我に金錢なし、書畫をもて金錢とす
- 一、我に衣服なし、書畫をもて衣服とす
- 一、我に家倉田地山林川等なし、書畫をもて家倉田地山林川とす
- 一、我遊所へ行かず、書畫交易俳諧をもて遊所とす
- 一、我に師なし、古今の名書畫をもて師とす
- 一、我地獄極樂を知らず、書畫をもて地獄極樂とす

- 一、予天下の法を守り、神佛の像畫を安置すといへども、あへて祈らず、我心體を以て神佛とす
- といふ有名なものがある。

彼に次の様な逸話がある。東山の六波羅密寺に明の董其昌が畫いたといふ山水の圖があつた。或年その寺の開帳があつた時、蕪村は毎日參詣して怠らなかつた。寺僧がその信心の厚いことを賞めると、蕪村は「いや私は、名畫を拜みに來るのです」と言ふたそうである。

至極の境地

劍道をもつて至極の境地に達した人に、我が宮本武藏がある。彼が六十歳の時に書かれた五輪書の序の一節に「我若年の昔より兵法の道に心をかけ、十三歳にして初て勝負す。その相手新當流の有馬喜兵衛といふ兵法者に打勝ち、十六歳にして但馬國秋山といふ強力な兵法者に打勝ち、二十一歳にして都に上り、天下の兵法者に逢ひて數度の勝負を決すと

いへども、勝利を得ずといふことなし。その後國々所々に至り、諸流の兵法者に行逢ひ、六十餘度まで勝負すといへども一度もその利を失はず。その程年十三より二十八までのことなり。三十を越えて跡々おもひ見るに、兵法至極して勝つにはあらず、おのづから道の器用ありて天理を離れざるが故か、又は他流の兵法不足なる所にや、其の後猶も深き道理を得んと朝鍛夕鍊して見れば、おのづから兵法の道にあふこと我五十歳の頃なり。」とある。天下無敵の境にありながら、慢することなく、猶二十餘年をひたすら道の修業に懸命を盡し道至れりと調破する迄に至つた彼を思ふ時、寒けを催さしむる程莊嚴な心に打たれるのである。彼は又言ふ「兵法の理にまかせて諸藝諸能の道となせば、萬事に於て我に師匠なし」と。一道に至り通ずれば萬事皆その理は一つであることを思ふて、我等の道に夫々の精進を續けなければならぬ。

退一步、進一步

何事を爲すにも一步退いて考へることと、思ひ切つて一步踏み出すことが同時に必要だと思ふ。乃木大將の言はれた熟慮斷行である。或る先輩の言はれたことであるが「自分は、思案に餘るような大問題にぶつつかつた時には、いくら考へても無役だから、目をとちて思ひ切つて一步前に出る。そうするとたいていの難關は突破することが出来る。かくして五十何年を経た。」と實に意味深い言葉である。

波 紋

一日郊外の石神井に遊んだ。池の邊の旗亭に陣取つて、暫しの涼を入れてゐた。上も下も大雑沓である。

隣のテーブルに座を占めた三人連の青年があつた。その中の一人は二言目には「氣持がわるいや」を連發する。初めのうちは笑談半分で洒落のつもりであつたが、度重なるにつ

れて次第にほんとに氣持が悪くなつた來たらしい。遂には女中が腹を立てる、連の二人が怒り出す。隣近所のお客は皆氣をくさらして、ぶつ／＼言ひながら歸つてしまつた。それでも彼は一人で「氣持がわるいや」をつゞけてゐた。一人の人の心持が、直ぐかくも多くの周囲の人を動かすのであることを思ふて、實におそろしくなつた。「氣持がわるいや」の波紋は遂に一切を氣持わるくしてしまつた。池に小石を投ずると、その波紋が次第に大きくなつて遂には岸を打つように、我々の言動が直ぐ周囲に影響するのであることを思ふ時、我の問題は決して我一人のみの問題でないことに氣がつくであらう。

ほんもの

古きが故にその古さを貴ぶには當らない。又新しきが故にその新しきを誇るのも誤つてゐる。一つは骨董趣味的であり、一つは徒らに新奇を戀ひ流行を追ふの徒である。現今の思想界を見よ、一切の世相を見よ、そこには何が流れてゐるか。凝視せよ、沈潜せよ。然

してその古きその新しきそれぞれの中から、眞理を把握しなければならぬ。

古いといふだけ又新しいといふだけ、只それだけでも全然價値が無いといふのではないけれども我々は常に「ほんもの」をつかむことの爲に全力を傾注すべきだと思ふ。學界といはず藝術界といはず、あらゆる方面ともあまりに遊樂と賣名、模倣と競争とのみに忙しい様に思はれてならない。流れの方向を見すへる事が必要だと同様に、其の奥に何が動いてゐるかを見極めなければならぬ。

十年一期

彼は十年前既に文壇一方の曉將であつた。

當時權威ある雑誌は競ふて彼の作品を發表した。又どこの本屋に行つて見ても彼のものが山積してゐた。

其の頃彼は妹に向つて。

「世の中の進み方があまりに烈しいので、とても追いついて行けさうもない。近頃は物を書くのが恐ろしい位だ。」といった意味の言葉を口癖のやうにもらしてゐたさうだ。彼の名が文壇の中心からかくれたのはそれから間もないことであつた。昨今では殆どその名をさへ忘れられんとするに至つた。

彼はその後何年かを没頭して自己充實に努めてゐたのであつた。突然或年の新年號の某雜誌に彼の力作が發表された。文藝批評家たちは筆を揃へて之を激賞した。又その名をすら忘れられんとした作家でも、一度生命あるものを發表すれば、世間は之を歓迎するだけの餘裕が出来てきた。といつて讀者の進歩しつゝあることをもほめてゐた。賣名賣文の萬年新進作家で終つてしまふものゝ多い世の中に、之は又實に力強い話である。

十年一期といふ、少くも十年。

慢心せず、怠らず、歩一步と向上への道を辿らなければならない。

建

設

下蒔えの畦道づたい、朝な朝な道具箱かついだ大工さん達が通る。

復興東京の郊外は到るところ、彼方でも此方でも絶え間なしに槌の音がする。

畑がつぶされて空地から空地へと、新しい家が次々と建てつらねられてゆく。發展又發展。

昨日はあすこの棟上げに頭梁の葺いきやり節を聞いた。今日は女たちが聲張りあけて井戸がへの綱を引く。

壁塗る左官、瓦を葺いてゐる屋根屋さん、山と積まれた材木の中に立働く多くの人々、普請場には朝から夕まで、懸命の努力がつづく。おゝ建設の喜び、夕靄に木々の緑の香がたゞよふ。絶え間もなしに普請場の音が聞える。

病 床 語
理 窟

死ぬか生きるかの境に立つては強いことを言へたものではない。激動されて治る様な病氣にはてんで羅りはしない。

病氣には絶対安静第一なり。

病人には徹底したる親切第一なり。

皮 肉

これは悪口ですが「病人は慰めてやるのが大切ですよ」と彼に御傳へ下さい。

俗 物

人一人死んだり生きたりすることよりも、自分一人が楽しむことの方がどれだけ大問題だか知れない、と思つてゐる人が多いのではあるまいか。

自分の爲に

自分の爲に他人の健康を祝福する者がある。

そんな人間に限つて他人が病氣でもしやうものなら、意氣地無しだと悪く言ふ。

人 間

蠶蛙や蛇を見たゞいで胸が悪くなつたり、螢や蛸や秋の虫の戀するのを見たり聞いたりして嬉しがつたりする。

人間て馬鹿な者だ。

蛆 蟲

蛆虫の生活と人間の生活とどれだけ違ふのだらう。

女

女でなくてはならないことがある。

役立つ物

正月に昔のお弟子七人から贈られた御年玉の半紙幾十帖が役に立つたり、友の書いて呉れた素人繪が擔ぎ出されたり、父の形見の一振が床の間に飾られたり、いろんな物がいろんな時にいろんな事で役立つものだ。

四種類の人物

止めたい事と、止めても差支へ無い事と、止めたくない事と、止めては困る事とがあるやうに、止めて貰ひ度い人と、止めても差支ない人と、止めさせたくない人と、止められ

ては困る人との四通りの人物がある。

純眞性

病氣の時のやうな純眞な心と、清淨さを、常に持つてゐることが出来たらと思ふ。

我儘

我儘をするなら病氣になるのが一番よい、同情があるから許される。

戀

病人のやうに無邪氣で、病人のやうに言ふ事を聞いたら、戀人から好かれるだらう。

淋しさ

煙突の煙を見ても、働いてゐる人が美しくなる、働ける立場にゐて働くことの出来ない

程淋しいことはない。

休 刊

機關雜誌を一ヶ月休刊したらその團體は、どうなるだらう。
俺が一箇月寝てゐたらどうなるだらう。

マ イ ナ ス

俺の一生から病床幾日間を引いたら、後に何が残るだらう。此の世の中から俺といふ者を引き去つたら後に何が残るだらう。

加へても引いてもそれが大問題でないならば、零とたいした違ひはない。

寝て居る心

不平も不満も不安も煩悶も懊惱も悲觀も何も無い。有難いことだ。只時々ジレツタクな

る。

時 代 物

俺の室に清水次郎長が使つたといふ二間柄の大鎗と、親譲りの刀身九寸五分の日本刀とがある。

磨かず研がず。これ等を時代物といふ。

化 の 皮

長く湯に入らぬ爲か、熱が高かつた爲か、腫れた爲か、拭く度毎に顔の皮が剥ける。
いつそのこと少しも残らず皆剥けてしまへばよい。

今まで餘りに皮を被り過ぎてゐたやうな氣がする。剥いても剥いても剥ぎ切れないものだらうか。

俺は生きてゐる

「生きてゐるのか」と問はれたら「さうだ」と答へるだらう。

「死んだのか」と聞かれたら「さうかも知れない。」と言はざるを得まい。

雷と舶來

「明神様の太鼓だよ」と教へられたら、雷様が好きになつた。「舶來だよ」と珍重がらせられたら、和製品に西洋のベーパーを貼つたのを嬉しがるやうになつた。

自己辯護

一切の辯解と言ひ譯とを止めよ。いくら立派な口實があるにしても「何とも御詫の申上げやうも無之」が何にならう。若し謝さねばならぬことがあつたら、男らしく兜を脱ぐがよい。

只やれるだけをやれ。盡せるだけを盡せ。

出直し

旅行をしたらば見るべき所は落ちなく見て來るがよい。なか／＼出直しは出来るものではない。

人生には出直しが無い。

書き直し

手紙の書き直しをする人がある。

飯の食ひ直しをする奴があるか。

尊い経験

或人から「病氣といふ尊い経験を得られたことを羨しく思ふ」といふ意味の見舞狀が來

た。眞實だ。

然しそんな人に「病氣の味を知らずに働いてゐる人が羨しい」と言ふてやりたい。

地 獄

「寝るが極樂起きるが地獄仕事と小言が無けりやよい。」

そんな勝手なことを言ふ横着者に、せめて十日も病氣をさせて苦ませてみたいものだ。成る程寝てゐるのは苦しいものだといふことがわかるだらう。

精出して身を惜まぬが佛なり樂をしたがる者は是れ鬼。

三 大 義 務

- 一、藥を飲む事(靈藥は口に苦し)
- 二、お粥を食ふ事(麥飯に味噌汁が食いたい)
- 三、便所に行く事(これは大問題なり)

右の條々堅く相守るべき事。

「土曜日曜毎日續きあとの御用(五曜)が無けりやよい。」といふ厄介な連中に、この三大義務を負はせてやりたい。

修 養

魚釣り程馬鹿なことは無い。それを見てゐるのはなほ馬鹿だといふ。

病氣で寝てゐるの程よい修養になることはあるまい。

それを看病するのはもつとよい修養になるだらう。

靈 藥

「西瓜糖」は腎臓病の靈藥だ。「如何ですか黨」は毒だ。

尺 蠖

尺蠖といふ虫がある。

彼が縮むのは伸びる準備だといふ。然しそれがたとへ伸びる準備であるにもせよ、縮むならば、先づその時間だけは豫め一生から差引いてかゝらなければならぬ。

今 一 息

牛乳を一日に三合づゝ一ヶ月近く飲みつゞけた。病氣だから仕方がないが、飽きてしまつた。

今一息といふところで残したくなる。それを飲みほす時の辛さつたらない。

伸 び よ

木の芽よ伸びよ、お前が伸びると、俺の心の芽も伸びる。

若葉よ繁れ、お前が繁ると、俺の心がすがすがしくなる。

花よ咲け、お前が咲くと、俺の心が明るくなる。

雨よ降れ、お前が降ると、俺の心がしつとり濡れる。

血

何かの度にビクンとする。神経がビリツとする。精神が緊張する。青年の赤い血が湧くこれは病氣には大禁物だ。

然し血を湧かさないうやうな青年なら死んでも同様だ。

由來此のビクンが天下を動かす。

赤穂浪士中で、ビクンの最高潮に達した連中が、四十七人結束してあの義舉となつた。

清麿のビクンが宇佐八幡の神勅となつて妖僧の肝膽を寒からしめた。

幡隨院長兵衛は旗本を向ふに廻して、江戸市民の爲に氣を吐いた。

道

僕の室に南洲翁の額がある。いつもその姿に接する時導かれ勵まされ教へられる。

翁曰「道は天地自然の道にして人は之を行ふものなり。故に天を敬するを以て目的とす

天は人も我も同一に愛す。故に我を愛する心を以て人を愛すべし」と。
十年の役には理窟ぬきにして、二萬人が彼の爲に命を投じた。

後まはし

母曰「坊や御葉子を上げやうか。うまいよ」

坊の姉曰「母ちゃん私にも頂戴な」母曰「何です大きななりをして・」
何でも後まはしにされる、人間がある。

共鳴する人、しない人

氣の合ふ人、合はぬ人

感じのよい人、悪い人

親切な人、不親切な人

働く人、働かない人

丈夫な人、虚弱な人

忠實な人、不忠實な人

温かみのある人、冷かな人

眞面目な人、不眞面目な人

陽氣な人、陰氣な人

正直な人、不正直な人

涙ある人、涙なき人

鼈

鼈に食はれると神鳴様が鳴る迄離さないといふ。

295
363

糖は食い切る迄離さない。
一度掴んだら死んでも離すな、

熱

病人は熱で苦しめられる。人は熱で動く。かと思ふと勝手な熱を吹く奴がある。

在るべき物

在るべき物は、在るべき所に、在るべきやうに、在るべきものだ。

—おはり—

大正十五年九月二十五日印刷
大正十五年九月二十日發行

東京府千代田区下谷五七八
發行所 三樂會本部

印刷所 塚田印刷所
東京府千代田区下谷五七八

東京府千代田区下谷五七八
發行所 三樂會本部

東京府千代田区下谷五七八
發行所 三樂會本部

骸は食い切る迄離さない。

一度掴んだら死んでも離すな、

熱

病人は熱で苦しめられる。人は熱で動く。かと思ふと勝手な熱を吹く奴がある。

在るべき物

在るべき物は、在るべき所に、在るべきやうに、在るべきものだ。

——おは——

大正十五年九月十五日印刷
大正十五年九月二十日發行

非賣品

東京府下落合町下落合五七八

著者兼 發行者 藪 季 光

神田區仲猿樂町九番地

印刷所 塚田印刷所

栃木縣真岡町

發行所 三樂會本部

振替東京一五九一一番

終

